



祈るモーセを支えるアロンとフル J.E.Millais

この時代は国境がありません。様々な部族が群雄割拠していました。その中で生き延びるには「勝てば官軍」という言葉があるように、あらゆる武力、知力、財力を用いて、勝つしかありません。イスラエルの民も勝って進む道しかありません。聖書には、兵役という言葉はあっても、不思議なことに武器の剣・槍を作る鍛冶屋、兵士訓練の様子は全く記されていません。どのようにして勝つのでしょうか。現在、ユダヤ人は金融や、映画やTV、また知的専門職に於いて、世界をリードする民族となっています。昔から、イスラエルの戦法はその辺りが要点だったのではないのでしょうか。けれども、聖書ではモーセが祈り、神のみ心に適った時、勝利を得ていくと記されています。シナイの荒野を出発してすぐ、民は食べ物、水の不足を訴えて、不満、泣きごと、不平が始まりました。モーセが神に祈って、マナやうずらで飢えを満たすように計らいます。水を求めて苛立つ民に、モーセはつかつかとなり、神の言葉を無視し、岩を叩いて水を出してしまうこともありました。

一番最初にエドム人に、通過を認めてもらおうと交渉しますが、拒否され、迂回して進みます。民は苦しくてモーセに逆らいます。荷が重すぎるとモーセも苦しみ、傍らで支えてもらうため 70 人の長老を選びました。カナンに侵入するに際し、モーセは各部族から一人斥候を選び、偵察に行かせます。カナンの様子を知った斥候は怯えて民に不可能だと伝え、民も恐れ、エジプトに引き返した方がましだと泣きごとを言います。斥候のうちのユダ族のカレブとエフライム族のヨシュアが、「神の約束を信じ、勇敢に進もう」と民に訴えました。

もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあの土地に導き入れ、あの乳と蜜の流れる土地を与えてくださるであろう。…主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。(民 14:8-9)

モーセも「主が与えると誓われた土地にこの民を連れていくことが出来ないなら、主の名声はすたれるでしょう」と神を脅迫するような祈りをしています。神の約束だけを勝利への道と信じたのです。

彼らは必死で旅を進めていきます。アモリ人との戦い、バシャンでの戦いで勝利をおさめて行きます。イスラエルは戦い、町々を「絶滅」させたり、「全軍を一人残らず撃ち殺し」たりして、占領して行きます。あまりにも残酷な表現で恐ろしい限りです。これは大げさな表現を好むイスラエルの言葉で、実際とは異なるでしょう。冷静に考えれば、勝った場合は、敵国の制度、法、などすべてのシステムを断ち、自らが統制できるシステムに完全に切り替えるということを示しているのでしょう。



ヨルダン川で Gustave Doré

エリコに近いヨルダン川の対岸のモアブの平野に辿りついた時、不思議な事件が起こります。モアブの王バラクは、イスラエルに呪いをかけてもらいたいと占い師バラムに願います。懇願されたバラムは託宣を求めて祈りますが、呪いどころか三度も祝福の託宣を与えるのです。「神の祝福されたものをわたしが取り消すことはできない」(民 23:20)と。モアブの王バラクは諦めて引き下がります。ミディアン人と連合を組んで戦ったバラクは戦闘で殺されてしまいます。また占い師バラムもヨシュア記では殺されたと記されています。